會報

1952年6月 | 161 | 日本山岳會

英京嘉音

松方三郎

報せて來た事柄は極めて簡單なことだつた――というよりはその文章そのものにしても、ほんのノートといつた、たかだか三行ばかりのもので

秩父宮がふたゝびアルパイン・クラブの名譽會員に歸られたということを知つて君はきつと喜ぶに相違ない

というそれだけのものだつた。たゞ自分としては、そのことの持つ意味や、こゝに至つた經緯などを多少とも想像出來るだけに、正に大いなる喜びをもつてそれを讀んだのだつた。

どこの會にもあることだが、アルパイン・クラブの場合にも通常會員と名譽會員との二つがある。最近の規則書を見ると、會員になる手續は多少簡單化されたようだが、それでもなかなか難しい手續を必要とする。

第一に通常會員になるためには二人の會員の推選を必要とする。そしてその内の第一推選者は直接にその候補者についての知識をもつていなければならない。

候補者の年齢は二十一歳以上と決められている。

候補者を推選する場合には會で決められた申込用紙があつて、それの各項目にそれぞれ書込む必要がある。姓名、國籍、住所、職業、登山歴、それぞれの登山當時の同伴者、文學、科學、藝術方面を通しての寄與、所屬登山團體等を書込むのであるが、それに本人と二人の推選者の署名を加えて名譽書記に呈出し、名譽書記はそれを次回の委員會に呈出する。

委員會は右の申込書を檢討して第一次の選考を行う。この委員會の選考を通過した候補者については、右の諸項目をそれ〴〵書添えた上で會員に公表する。候補者の資格の充分又は不充分につき、會員としての適格不適格について意見のある會員は名譽書記までその考えを傳達する。

公表後一ヶ月を經た上で、委員會は入會決定の投票を行う。會員から何等かの意見表示のあつたものについては、委員會でその意見を檢討する。新入會員選擧のためには委員七人の出席がなければその委員會は成立しない。出席委員中三名またはそれ以上の反對投票があつた場合その候補者は會員として選擧されない。

以前は會員の選擧は委員會の責任ではなくて會員總會の仕事だつた。十に對し一の黒票が入ると落第という嚴しいもので、これは少し行きすぎるというので、現在のように委員會一任案が出たこともあつたが、老人組の大反對でつぶされてしまつた。ちようどその席にぼくも居合せたのだから一九二七年ごろのことだろう。この點が現在のように變つたのがいつであるか、十何年も音信不通だつたわけだから詳にしない。問題の委員會は委員九名に役員（會長、副會長二名、名譽書記、名譽會計各一名）それに五名を超えない特別委員で出來上つているから最大限十九名、その中で三名が黒票を投じれば落第というのだから大分緩和されたことになる。

もちろん名譽會員についてはこんな手續は必要としない。委員會が自巳の權限において

クラブのためまたは登山のために例外的な價値のある寄與をした優れた登山家または人物

を推擧出來ることになつている。

一九五一年の會員名簿を見ると名譽會員として十二人の名が掲げられている。

ベルギー皇帝からモン・ブランのシャールル・ヴァローまで主として各國の山岳界の長老というような顔觸れだが、かつてのフレッシフィールドやヤングハズバンドの名が消えているのは淋しい限りだ。會の長老としては一八八二年に會員になつた今年九十六歳のジョージ・ベイカーの名が見えるだけだ。

名譽會員の中では秩父宮が最年少の名譽會員だと思うが、殿下が最初に名譽會員推選を受けられたのは一九二七年か二八年だつた。大正天皇の御不例でにわかにアメリカを廻つて歸國され、英國の留學もアルプス登山の方もそのまゝになつてしまつた殿下に對する英國の山の先輩達の氣持が、この名譽會員推擧という形で表れたのであつて、當時はまだ健在であつたウェストン老師などがその主唱者の一人だつた。そんなことを思い返えして見るとその間に横わる四半世紀の年月の間に起つたさまざまの出來事、わけてこの度びの戰爭のことなどを通して世界の、また日本の變貌の激しさに心をうたれざるを得ないのであるが、日本の國際社會への復歸と時を前後して、アルパイン・クラブが殿下を再び名譽會員にお迎えしたということは、日本の登山界が再び國際的の登山社會へ復歸したことの一つの著るしい表徴として、ことさら感慨の深きをおぼえるのである。

マッターホーン單獨行

伊藤　愿

手さぐりでマッチを捜して蠟燭をつけ、腕時計をかざして見ると、丁度四時になつている。四時にお部屋のドアーをノックしておこします。明日はきつと上天氣、大丈夫登れます。といつて山案内人たちはホテル・ベルベンデールに泊つている三十人ばかりの登山客を、昨夜めい〳〵の部屋に送り込んだのに、山小舎はいやにシーンとして靜まりかえつている。ソット寢臺を下りて窓へ近よつて見ると意外！

雪が降つている。ルチエルンからやつて來たという同部屋の登山客も起き出して、窓を開けて積つた雪を手で掬つてさも驚いたといつた恰好をして見せた。變り易い山の天候の常とはいえ、昨夜は滿月近い月まで出ていたのだから私も驚いているのだ。今年（一九五一）のスイスの山はことに天氣が惡かつた。小雨が降つているチエルマットの驛におりてから今日までの一週間、上天氣はこの前の日曜日だけだつた。皮肉なことにカソリック信者のチェルマットの山案内人は、教會へ行かねばならぬからといつて日曜日は山登りはできないという。尤も、ガッカリしていたら九時頃になつてナイロンのザイルを擔いでやつて來て、登山鐵道に乘つてリッフェルホーンへ遊びに行こうと誘いに來た。岩登りして遊ぶ程度なら神様のお許しが出るらしい。

一吋以上も新雪が降つている今日はたとえ神様が許して下さつても駄目らしい。また寢臺にもぐり込んでしまつた。山小舎の騷々しさで眼が醒めて食堂におりて見るとお客さんの大部分は下山の仕度をしている。昨夜食卓を一緒にした組は、寒くて昨夜は睡眠がとれなかつたから、チェルマットへ一度おりて又天氣になりそうだつたら上つてくると挨拶して出て行つた。

お書まえにはこのマッターホーン・ホテルはすつかりがらあきになつてしまつた。昨日は滿員で泊れなかつた隣りのヘルンリー・ヒュッテも人けがなくなつてひつそりしている。山の天氣は天の邪鬼だ。この天氣では當分山は駄目と諦めてみんなが下山すると、陽が少し射して前のテラスに積つた雪が融けてきた。据えつけの望遠鏡をのぞいていると、どこからかヨードルが聞えてくる。お客さんがみんな村へおりてしまつたのでフロイラインが部屋の掃除をしながら樂しそうに歌つている。掃除を濟ますと、一人部屋があいたから私に部屋を移れと勸めてくれる。一人部屋の窓は東を向いて、眼の下に大きくフルグ氷河が擴がつて、その向うに豪壯な屏風——左から、モンテ・ローザ、リスカム、ブライトホーン、小マッターホーンと連なつて右の端はマッターホーンのフルゲン稜におわる山なみが眺められるすばらしい部屋だ。ブライトホーンの肩あたりから昇る滿月をこの窓から眺めた夜は、あまりにこの景觀の美しさに寢るのが惜しく、いつまでも見入つて夜の更けるを知らなかつた。

この部屋は窓が東を向いているので朝日が實によく當る。そのお蔭でマッターホーンに獨りで登ることになつてしまつた。頼んでおいた若い岩登りの好きだという案内人はどうしたわけか私と一緒に登る

イタリヤ山岳會會報

一九五一年七—八、九—十、十一—十二各號の眼につく記事は、

一、山での遭難　一九五一年七、八兩月イタリア・アルプスでの遭難事件四八、死者五三（外人六を含む）を分類すると

（一）未熟登山者やハイカーで、山徑、草つき、やさしい岩壁、雪のない谷、六かしくない峰等からの墜死　二三（内女二）

（二）單獨又はアンザイレンせぬ登山者で、不注意のため、時々落石がある程度の六かしくない地形のところでの墜死　一〇（内女一）

（三）アンザイレンした愼重な登山者で、高山又は六かしい地形のところでの墜死　一七（外人六を含む）（内女二）

右のうち（一）の半分以上は二十歳以下であり、つまらぬ原因や準備裝具處置等の缺點によるものだから、アルピニズムの點から問題になるのは伊人については八件である。之を（一）、（二）の合計三十三件に比べると非常に多いとはいえない。

主なもの十二件のうち

A（1）パーティ全員墜死　四組九名

（2）パーティ墜落内一名死亡　二組二名

（3）パーティ中一名のみ墜死　二組二名

B　單獨行又はアンザイレンせぬもの

（1）墜死　二名

（2）懸垂中捨繩切斷　一名

（3）行方不明　一名

即ち主なものはパーティ全員—墜落（六組十一名）で、大多數の場合資材よりは處置のまずさによる。一般に確保のテクニックが充分のみ込まれておらず、應用されていないことは、驚くべきものがあり、これを考えれば遭難がこの程度に止つているのが不思議なくらいである。

二、ザイルの特性に關する研究

（一）太さ及び重さと強さとの關係

（二）牽引とショックとに對する抵抗

（三）延びの觀念

（四）ぬれた場合、凍つた場合、結んだ場合などについて研究し、麻とナイロンとを比較して、

（イ）ショックに最もよく堪えるには少くとも麻は一二％ナイロンは四八乃至五〇％の延びを要する

（ロ）引ばつたとき兩者殆ど差はないが、ショックに對しナイロンは麻より五倍たらず強い（ハ）ぬれると麻は三四・九％の水を含み八・三％短くなつて強くなる。ナイロンは一五・七％の水を含み一・二％長くなつて弱くなる（ニ）凍る

機會をいく度も逃す破目になつて、私は既に十日も待つている。案内人を傭つてヘルンリー稜を登るなんてことは御免だといつてあるので後まわしにされているわけだ。十七日の朝も、登山客が一しきり出發してゆくのを見送つて又寢床へもぐり込んだが、部屋一杯に朝日が射し込んで來てはもう寢込んでおれなくなつて食堂におりた。コーヒを頼んだがお湯もないとかで七時になつてやつと輕食を出して貰う。この上天氣に、山小舍で一日過すのは勿體ないからソルベイ・ヒュッテあたりまで寫眞を撮るつもりでヘルンリー稜をぶら〳〵登つた。

ところどころ右か左かと思案した程度で、十一時二十分ソルベイ・ヒュッテにつく。マーセル・クルツの案内書を讀んでおいたことが大いに役に立つた。天氣はよし、時間もまだ早い。二三の登山パーティも頂上を目指して出掛けて行く。もう少し上まで登つてみたくなつて少憩して出かける。所どころ手ごわい個所にぶつつかる。あの場所は難場に違いないと思い乍ら近づくと太い固定綱が時には三本位も懸つている。一回不覺にもピッケルを落してしまつた。これは、もう退却の潮時と覺悟する。しかし不思議なことに三十米ばかり下でピッケルは雪の上に止まつた。ビブラムの登山靴が驚くほどよく利くお蔭で、グリンデルワルドで購めたベントを取り戻す。ピッケルがかえつたとなると、これは頂上まで頑張れということらしい。今日は登るつもりでなかつたので一つより持つて來なかつた手袋は凍りだしたが、勇を鼓して、ショルダーのところの雪の斜面を登りきる。傾斜が少し緩くなつたと感じたとたん眼の前に幅の狹い雪の稜線が中だるみになつて中か空に浮橋をかけたように延びている。私の立つているところがスイス側の頂上で、雪の浮橋の向うの端はイタリー側の頂上なのだ。二時二十五分。イタリアン・サミットのところに登山綱をつけた二人組が立つている。寫眞をお互に撮り合つて、あとで交換する約束をした。風もあまりないおだやかな日だつたが陽が漸く傾いたせいか、寒くて頂上に永く居られない。頂上を辭して三十分ばかりやゝクラストした斜面を一歩づゝ愼重に降りる。先に降りた二人組は長すぎるザイルを些さか持てあまし氣味にしている。寒さが段々増してきて手袋は凍りついてしまう。遂に話し合いができてこの二人組のザイルに加わつた。お蔭で安全感は増したが、ソルベイ・ヒュッテについた時は八時を過ぎてしまつた。折からの滿月で、辛じて徑は辿れたものゝ此の調子ではこれから先どの位時間がかゝるか見當がつかない。ソルベイ泊りに決める。既に五六人の先客がある。そして驚いたことには我々のあとからあとから増えて十四五人もこの避難小舍に泊つたので大混雜。雪の狀態がよくなかつたのでどの組もひどく時間を費してこの始末。月夜でよかつたものゝ、若し天候が急變でもしていようものならみんな事故を起していた組かも知れない。食糧にしたところが、私のリュックの中から出てきた二食分のランチとソーセージ、チューブ入りのミルクが皆の羨望のまとだつた。途中から仲間になつた二人とソルベイに殘つていたその僚友との四人でこれを分けて喰べて、辛じて小舍の皆んなに一枚宛わたつた毛布にくるまつてスシ詰めになつて寢る。

翌朝、窓から朝日がはじめて射し込んだのは四時四十分、五時になるとブライトホーンの肩のところから旭が黄金の矢を蒼ぞらに放ちはじめた。足を滿足に伸ばせぬほどの窮屈な一夜だつたが、標高四千二百米の山小舍で迎えた朝の景色はスイスの山の忘れ得ぬ思い出である。

（カットは川喜田壯太郎氏）

と麻は牽引に弱くショックに強くなり、ナイロンは乾いた時より弱くなるが、ぬれた時よりは牽引にもショックにも強くなる（ホ）結ぶと兩方とも強さは約半分になる（スキスの調査による）（四）ザイルの規格に關する一八六三年以來英國山岳會の研究殊に一九四四年以來ブリチッシュ・マウンテニアリング・カウンシルで研究の結果（機關紙マウンテニヤリング第一號—一九四七年—所載）と佛國山岳連盟決定のものとを紹介批評し、さらにカラビナの強度に關する研究を提唱している。

三、ガルワル・ヒマラヤの過去と現在　世界登山界に將來ヒマラヤが占める大きな地位を強調し、伊山岳家はじつくり準備して將來の飛躍を期することが必要なりとて、過去に於ける各國遠征隊の行動を摘記し（わが立教隊のナンダ・コート遠征について、五名の青年から成る日本最初のヒマラヤ遠征隊が一九〇五年ロングスタッフが試みた登路によつて登頂に成功したと記す）、次で一九三八年シュワルツグルーバーの塊隊（ガンゴトリ氷河を圍むスリ・カイラス（六九三二米）以下六千米級六坐に登頂し、ケダルナート（六九四〇米）サトパント（七〇六二米）チヤウカンバ（七一三八米）にいどんだ）、一九三九年アンドレ・ロッシュの瑞西隊（デュナギリー（七〇六六米）ゴーリ・パルバット（六七一二米）に初登し、チヤウカンバの頂に近く雪崩に人夫を失つて敗退）、同年カルビンスキーの波蘭隊（ナンダ・デヴイ東峰（七四三四米）初登後ティルスリ東峰（七〇七四米）をめざし六四〇〇米のところで幕營中の隊長外一名を雪崩に埋められて敗退）、一九四七年ロッシュの瑞西隊（ガンゴトリ山群のケダルナートの頂近く六八三二米で隊員とシエルパが墜落負傷したが再擧初登に成功、チヤウカンバは降雪のため失敗、サトパントを北々東稜から初登）につき相當くわしく紹介してある。

四、東部ドロミテの先蹤者

一八二五年ベルモ（三一四九米）に登つたバッチスタ・ヴエッキオ・ベリと一八五七年J・ボールの初登を案内したトマゾデ・ゲットと一八五〇年頃アンテラオ（三二六三米）に登り十三年後に獨人グローマンを案内して初登の名をなさしめたマッテオ・オッシについてくわしい考證がある。何れも獵師で羚羊を追いつめながら、登攀不可能といわれた高峰によじ登つたのである。

五、ヴアリスの名案内フランツ・ロホマッテル（一八七八—一九三三）の人となりや山歴や彼と行を共にした著名登山家についての記

事。

六、ウインパーが彼の伴侶でもあり競爭者でもあつたJ・A・カレルの案内者手帳に鉛筆書きした一八六三年八月十一日付の頁の寫眞（シャルル・ゴオの著書に一八六九年の記載を最初のものとする誤をただす）。

七、エトナ火口の近年に於ける變異の火山學的記述

八、イタリヤ山岳會近況

（一）一九五一年三月支部長會議席上會長の演説によると（イ）通常會員五萬一千餘賛助會員二萬一千餘で、前年より數千名減つているのは戰爭直後インフレ的會員募集の結果が是正されつつあるのである（ロ）各支部が本部を中心に押し立て、相互に協力援助してほしいと力説し（ハ）岩登りとアルピニズムと二種の講習會を開き、それにはガイドやポーターも參加し、檢定合格者には一定の資格を與えている。

（二）會員コルチ教授は七十歳の高齢でベルニナ、モンテローザ山群に登り、マッターホルンからツムット尾根をかけて氣を吐いた。

（三）五十年以上の會歴をもつ一〇二人の中四六人がトリノ支部に集つて氣焔を擧げ、山岳博物館屋上の望遠鏡を通して舊知の高山に久濶を叙した。マエストロ・トスカニーニはトリノ支部會員として祝電を送り缺席を謝した。

（S・H）

ネパール・ヒマラヤ遠征について

昨年來、會員木原均博士等を中心として進められた京都大學のネパール・ヒマラヤ遠征計畫は既に毎日新聞にもその一端が發表されたので御承知の會員も少くないと思うが、最近に至り主催者側から右計畫を何ら條件を附することなく本會へ移讓し、今後は日本山岳會の計畫として進行せしめたい旨の申入れがあつた。よつて會は四月十六日臨時役員總會を開催愼重協議の結果、本件を會の事業として繼承すること、並にこれがため早急にコミッテイーを設置その人選を槇會長、松方理事長、及び西堀榮三郎三氏に一任する旨の決議がなされた。

計畫推進の任は主として近く設けられるコミッテイーが擔うのであるが、會としては從來の經常的な事業に加えて、新たに大きな計畫を持つた譯であるから全會員各位の熱意ある御協力なくしては到底十分な成果は期せられないので、この點御賢察の上倍舊の御支援を切に期待する次第である。

コミッテイー（日本山岳會ヒマラヤ委員會）は、次のようなメムバーが決定し、五月十四日すでにその初會合が行われ、今後の方針、事務局の運營などについて檢討した。

委員長　槇　有恒
委　員　松方三郎　日高信六郎　西堀榮三郎
〃　木原　均　藤島　敏男　堀田　彌一
〃　三田幸夫　伊集院虎一　今西　錦司

事務局は、渉外、庶務、會計などを擔當する總務部、調査研究を行う調査部、遠征隊の裝備、食糧などを擔當する裝備部の三班にわかれ、事務局長として松方委員、各班の責任者として藤島（總務）三田（調査）西堀（裝備）の三委員がそれぞれ決定、事務局員二九名も決定した。

なお、ネパール政府から五月中旬、本年度中に出る先發隊、本年の本隊に對する入國許可の來信があり、委員會は本年八月より四ケ月の豫定で今西錦司氏を隊長とする偵察隊を派遣することに決定し、隊員として、高木正孝、中尾佐助の二氏を推せんし目下着々準備をすすめている。

秩父の宮A・Cの名譽會員に

本會名譽會員秩父宮殿下には永らく英國山岳會の名譽會員でもあられたが、戰爭のためその關係が斷たれていたところ、此の程あらためて名譽會員に推薦申上げた旨松方理事長あて左の通り通知があつた。

You will, no doubt, be glad to learn that Prince Chichibu has resumed his Honorary Membership of the A.C.

T.S. Blakeney
ASSIST: SEC.
ALPINE CLUB

2/4/52

武田前會長へ記念品

戰後本會のため盡瘁され昨年槇現會長と交替された前會長武田久吉氏へ何か記念品を贈呈したいという役員會の決定に基き、豫て松方理事長に品目の選定をお任せしたが過般故茨木畫伯の風景畫一點の恰好の品目を得、同氏の許へ御屆けした。

小集會豫告

七月十七日　六時半
講演　オースタリーの山々
講師　高木正孝氏

望展上山

荒澤岳へ登ろうと誘われて、一九二一年の夏、その直下まで迫りながら登り損ねて以來いつかはと心に描いていた山だから、押取り刀で上野驛に驅けつけたが、さて驚いた。三日續いて休みという前夜だ。エン〳〵長蛇の列など〳〵いう生易しいものぢやない。たゞもう一面に人間がウゴめきヒシめいて、同行する筈の友達の姿さへ見當らぬ。成程日本が持つ強みは人的資源だけとは、このことかと兜をぬいでそのまゝ引返した。その夜の夢が荒澤岳でなくつて、超滿員夜行列車内の慘狀だつたとしても、別に不思議はなかろう。だが又しても荒澤岳を取逃がしたかと殘念でならない私は「高山深谷」第九輯（昭和八年刊）を取出してこの久戀の山の姿を飽かず眺めた。撮影者は櫻井敏夫とあつて中々の名手であるが、この輯以後櫻井氏の作品に接したことがない。或はもう山登りから足を洗つて若い日の回想を樂しんでいられるのだろうか。私にとつては未知未見の人ではあるが、そんなことを思いめぐらしながら、いくら年を重ねても山との絆を斷切れぬ自分を憐れんだのである。（不二）

小集會記事

三月二十日

演題　スイスアルプスの近況

講師　會員　田口二郎氏

三月のはじめにスキーを持つて八方尾根へ登つた田口二郎氏は、そこで、氏がスイスの山登りに出掛ける前の學生時代に歩るきまわつた後立山の雪の連峰が、その頃と少しも變らない姿で、あるいは激しく、あるいは靜かにつらなつているのを發見して、懷舊の念が押さえがたかつた、ということからこの日の講演ははじめられた。

北アルプスの連嶺は、昔あるいたまゝのものであつたが、そこに展開されている場面は、自分にとつてまことに興味深いものであつた、として田口氏の眼に映じた八方尾根における近代登山の二つの潮流を分析されたのであつた。

作　上田哲農氏

即わち、そこには、アンクルバンドに外傾姿勢、輕裝にいでたつたニュースクールのスキーヤーが鮮やかなフォームで滑降して來るのに再三行きあつたかと思うと、一方では、身に餘る重い荷を負つて、たどたどしく山稜から降りてくる一群とがある。前者はスキーを樂しみ、後者は山を樂しもうとする、はつきりと二つに分かれる流れがあるわけであるが、殊に後者の一群は、雪上露營等をとり入れて、明らかに目標をヒマラヤへと向けている。

自分も、學生時代にヒマラヤに對する憧憬と熱望をいだいた。だから、今の若い學生登山者が、ヒマラヤを理想の目標として、その登山方式を考え、試練を積もうとしていることはよくわかる。しかし、學校を出て間もなく、緣あつてヨーロッパに遊び、かなりの期間スイスアルプスの登山を行うことができて、激しい困難な山登りというものが、必ずしもヒマラヤだけではないということを感じたのであつたが、國際事情や、經濟條件が、戰前と甚だしく違つている今日、日本の山からアルプスへそしてヒマラヤへというコースを辿ることが、しかく簡單にはいかないことを考えると、自分の言うことは、今の若い諸君には理解されにくいかも知れない、と氏は話し續けるのであつた。

スイスのアルプスが、いかに困難であり、わづかの狀況の變化によつて、まるで手のつけられない惡場になつてしまうかについて、氏は豊富な彼の地の登山を追憶しながら、また近着の外誌を參照しながら、グリンデルワルトを中心とするベルナーオーバーランドの山々、それからワイスホルン、ロートホルン、ダンブランシュ、ブライトホルン、リスカム、モンテローザ、マッターホルン等のヴァリスの山々について、最新のニュースに樂しかつたであろうアルプスの旅の思出を綾織させながら、聽く者をして完全に彼の地に遊ばせるの感を深くさせるのであつた。

連休前であつたため山行に熱心な會員が山へ出拂らつて、聽衆は非常に少かつたのが殘念であつた。しかし、幸か不幸か、心靜かにアルプスの氷河の上をよぎる風の音に耳をすますような、落着いた雰圍氣の小集會になつたことをわれわれは喜んだのである。（O）

四月十二日

ネパール事情

講師　西堀榮三郎氏

今冬、會員の京都大學木原教授と共に渡印し、幸運にも祕境ネパールに入國して、ネパールヒマラヤの諸事情について研究された會員西堀氏が歸京され、この日久し振りに來會されたのを機會に、同氏から、最近の印度事情、特に各國が遠征隊を送らんとしている、ヒマラヤ登山の狀況について話をしてもらうことになつた。

西堀氏の渡印の目的は、京都大學から多年の宿題であつたヒマラヤへ遠征隊を送ることについての豫備調査と交渉とをかねたものであつたが、この計畫自體は、その後京大から日本山岳會へ移讓されていることは別掲の通りである。

ネール首相や政府要路の高官連との會見談は別として、氏は空路ネパールの首都カトマンズに赴き國王の賓客として、こゝでもまた各省大臣等と交歡した經緯は、さすがに西堀さんらしいねばりと、押しの強さがうかゞえて興味深々たるものであつた。

氏は百枚餘にわたるカラーフイルムのスライドを映寫しながら、ネパールの風俗、習慣、高官の邸宅、市民の家庭、カトマンズ附近の風景等あますところなく説明された。寫眞の出來榮えは見事なもので、その色調も申し分なく、約三時間倦きるところを知らなかつた。期待していたヒマラヤの連峰は、氏の旅行がカトマンズから餘り離れることができなかつた關係上、そうたくさんは映されなかつたが、それでも屢々ヒマラヤ第十三位の高峰ゴザインタン（八、〇一三米）などの美しい巨容があらわれて、われわれは思わず息をのむのであつた。

佛像、獅子像、金閣寺など眼の覺めるような工藝の美があるかと思えば、さながら信州あたりの山麓そつくりの山村風景、段々畑の農村、はては日本人とまるでかわらぬ容貌のネパール人、國王の君臨する觀兵式、そしてその背景にはいつも氷河におゝわれた雪山。

西堀氏は燃ゆるような熱情をヒマラヤに寄せながら、ネパール政府の厚意は、必らずわれわれをしてヒマラヤ遠征を實現させるであろう、もしもジャイアンツを選ぶとするならば、それはマナスル（八、一二五米）ではあるまいか、と力強く結ばれた。（O）

會報に原稿を御送り下さい
十五字詰用紙を使用のこと

上田哲農氏作

會員通信

春の荒澤岳へ

成瀬岩雄
織内信彦

越後から會津へかけての邊は昔から私の好きな所。

五月三、四、五日と續いた連休に會員、藤井、織内の兩君を促して荒澤岳に登り、永年の宿望を達してきた。

期待に違わず他に登山者等一人もなく、殘雪タップリの枝折峠の上から、先づ荒澤岳の偉容に接した時は正直の所、身も心も引締るのを覺えた。

銀山平では、當年とつて七十四才の老狩人の家に宿を乞い、久し振りで爐端にアグラをかいて焚火を圍み語りあう内、はからずも同老は三十數年前、三田さんの平ケ岳登山の節、同行した案内人であることを知り、しかも當時の「三田少年」の寫眞まで見せられたには驚き且つ喜んだものである。

何も山を獨占する氣は毛頭ないけれども、どうも本能的に、人の少ない所少ない所へと足が向くのも、矢張山の人の人情の温かさの誘惑とでもいうのであろうか。

とにかく、會津の山奥で「三田少年」を語る旅なんていうのは悪くはないと思つた。（成瀬）

七十四才の富永老に、荒澤岳のぼりの誘いをかけると、一言で快諾、登路はきのう枝折峠からブリズムで偵察した際、ある程度可能性の見當をつけた蛇子澤の直登と決定した。問題は雪崩であるが、老人の意見では、今日のところは大丈夫だろうという。

蛇子澤は、頂上から出ている尾根の末端で二つに岐れている。僕たちは、むかつて左側をアイゼンでのぼつた。澤はデブリの散亂でしかも頂上まで相當の急斜面である。屈曲點はどれもゴルジュになつていて、無雪期には、おそらく瀧と淵の連續ではないかと思われたし、登降には大變な困難が伴うのでないかと思つた。

折あしく降りだした雨の中を、頂上右手の雪庇の上にぬけ、二時に宿願の荒澤岳に出た。三角點のやぐらも立てられなかつたという頂上は、やせた、せまいところであつたが、雨中とはいえ、遠望のきく日だつたので、守門、大鳥、未丈、魚沼駒、中岳、灰又山、平岳など、會津さかいの巨大な山々のうねりに、僕たちはしばらく、寒むくなるのも忘れて見とれていた。

それにしても殘念なのは、三十數年前、北ノ又川の上流をあるいて、この山頂を志しながら機會を逸した藤島氏が、今度も超滿員の上野驛から引き返えしてしまつたことである。僕たちは、人跡すくない荒澤岳の雪の上での祝福を、藤島氏のために送つて、再び荒涼たる急雪面を銀山平へと下りた。

のぼりがけのことであつたが、すぐ傍の樹上に熊が一匹、木の芽を喰つているのをみて、肝を冷やした。聲をあげると、するすると下りて、ゆつくりむこうへ行つたので一同ホッとしたりする。

五日の朝、枝折峠を越して大湯から小出に戻つたが、小出の伊倉剛三氏は、この方面に精通する會員で、僕たちはすくなからず同氏の助言と便宜を受けた。なおこの行には會員外の宮澤憲君を同行した。（織内）

石鎚連峰へ

望月達夫

伊豫西條驛に降りたつた諏訪多、原の二氏と私は愛媛縣企畫課長松崎宗光氏、愛姫山の會松長晴利氏、石鎚山岳會十龜太郎氏等に迎えられ、同夜はスライドによつて石鎚連峰の説明をきゝ西條市に一泊。翌五月二日、松長、十龜氏等案内の下に倉敷レーヨンの厚意によるバスで氷見から黒瀬峠を越え、加茂川沿いに河口を經て西の川でバスを捨て、常住、カマドコ谷を登つて瓶ケ森の廣々とした熊笹の頂に立つた。折からの五月晴に遠く劍山に至る迄の四國の山波を眺め、山腹を彩どる山櫻やアケボノツヽヂの花に眼をうばわれた。瓶ケ森に新設豫定の小屋の位置や笹ケ峰からの縱走路を見て同所に一泊。三日天候は下り坂となつたが子持權現の岩峰を經土小屋に至つて中食、強い南風は雨を交えてきたが更に西へ縱走を續け石鎚の北斜面に殘る數條の殘雪を横切つて二ノ鎖に至り、天狗岳の頂を踏む。降路を南に求め面河の溪谷を賞しつゝ溪泉亭に一泊し、翌四日はゆつくり關門まで歩き、其處からは松崎課長配慮のハイヤーで面河の谷を下り久萬を通つて霧につゝまれた三坂峠を越え、一路松山市へ向つた。道後温泉に旅塵をおとし夜は城南荘で久松知事、北川淳一郎、倉橋宗由氏等をも交えて相互に意見の交換を行つた。

短い山旅の後半を雨にたゝられたのは遺憾であつたが、石鎚連峰の持ち味が國體登山の見地からみて決して不向きでないことや、松山、今治、西條各地の山岳會員相互の協調性と熱意とを目のあたり見ることが出來たことは、少なからぬ收穫であつた。瓶ケ森と二の鎖附近に豫定の山小屋が建設されれば理想的なコースの採用も可能だし、他の競技に比して登山部門の準備が一番進捗していることからも、明年度の國體登山は大體順調に進行し得る見通しを得た。

尚明年度は地理的にも關西支部の協力に俟つ所大であり、これについては篠田支部長も既に約束されているが、今回特に關西支部からの參加を請うたのもその意味からであつた。

終りに前記三氏はじめ石鎚山頂迄サポートされた現地山岳會員各位に感謝する。

☆　☆　☆

たてしな池ノ平にて

交野武一

ラヂオでは、東京には金魚賣りが出たと報じてきましたが、當地春の歩みはまことに遲々たるものにて、まだ白の世界、今日など降らなくともよい雪が降りだし、なにごとによらず時期はづれは面白くありません。

スキー客もようやく絶えて（實際は下手も上手も今がすこぶる快的なのですが）、四邊まことに靜寂、この邊で讀み書きしたいのですが、薪がきれたり、飼料の荷上げなどでなかなかゆつくりできません。そこへもつてきて村の若い衆が「心に添わぬ嫁取り」を斷わるにはどうしたらよいかとか、近くの開拓團がつぶれて就職をたのみにきたり、どうも春になるとこんな土地でも人間がそわついてきて、やりきれません。

私にとつても、最後の冬、春でありますので、つもりつもつた想いに羽根をはやして、遠出をたくらんでおりますが、緬羊の出産でも濟みましたら、白馬か乘鞍か鳥海山にまいりたくうづうづしております。

二十七日に子供をつれて蓼科山に登りましたが、諏訪側八合目で吹雪いてきて門前拂いを喰いました。蓼科山は、四月二十日頃までは、春雪が充分に樂しめると思います。（三月三十一日）

五龍岳

名須川浩

三月二十二日快晴に惠まれて遠見小屋から、五龍に登りました。白岳の登りは矢張ぬかりました。白岳と五龍との鞍部に新設中の避難小屋は窓など一部未完成の爲、雪が屋根近くまで詰つていました。そこから上は殆ど國境尾根通し歩きましたが、相當の堅氷の部分もあり、緊張したアイゼンの登行を味わいました。丁度、頂上で大遠見に張つた明藥大のキャンプから登られた會の小田部氏と一緒になり、快晴の恣なる展望を共にすることができたのは愉快でした。スキーの方は數日の間にクラスト、ザラメ、雪降り等いろ〳〵遭いましたが、遠見小屋から下は正月に來たとき出ていた木も大分かくれて、廣々と快適なスロープになつていました。春としてはもう旬日位後のザラメをねらうのが得策でしょう。

九重のぼり

日高信太郎

四月上旬別府から加藤數功氏に導かれて九重山に出かけ、久住大船兩山にのぼりました。野やきがすんだばかりで山野のみどりはまだでしたが、アセビやマンサクの花が美しく、ほかに登山客とてはなく、三日間ほとんど全山を二人で獨占したような氣になつて、心ゆくまで陶醉しました。

私にとつては四十二年ぶりの再遊でした。すつかり開らけて交通が便利になつたのには驚きましたが、飯田（ハンダ）高原や坊ケつるの特異な景觀、山上から見はるかす久住から阿蘇へかけて大牧野の波立つスロープなど、いつ見ても日本ばなれした大觀は見あきませぬ。加藤さんが縣や厚生省を動かして實現に努めておられる別府から由布院を經て飯田高原を牧の戸越にぬけ阿蘇にいたる自動車道路が實現したら、すばらしい觀光道路になることはたしかです。

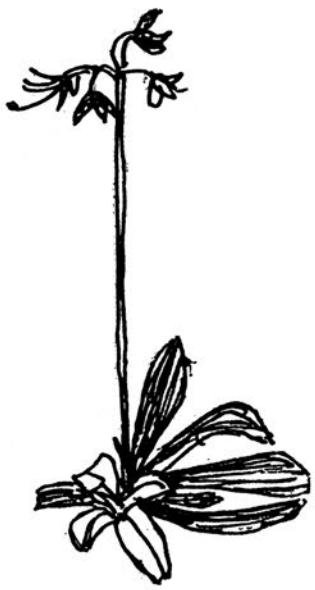
春雪の八甲田山

村井米子

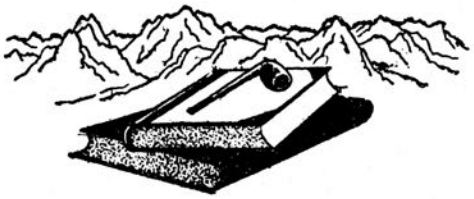
はるばると、八甲田山の酸湯から、お便りします。四月廿七日朝八時に青森着、バスで萱野茶屋まで。十キロの雪道は、輕く田茂萢岳（一三二四）に登つて、三時着。入山の日に、折からの新雪に美しい連山を展望したり、林間の快走で、すつかり感激。次の日早速、地獄谷コースを登つて、八甲田大岳（一五八四）行。宿からスキーを擔いで、ほんの二時間。頂上は雪解の火山岩に、コケモモやガンコーランが這い、西空に夢のように岩木山が浮んで、いとも長閑です。スロープは、北から東南へ、目も覺める程廣大、上はずいぶん急ですが、下がゆるやかなので、ザラメ雪のスピードが快適。午後、硫黄岳東南の急斜面で、三浦敬三さんのスキー術を練習。歸路のオオシラビソやブナの林も、樹間が廣くて快適な滑り、雪の深さ丈餘の豊かさ。

第三日は、骨休めの雨。第四日は、南八甲田の主峯、櫛ケ峯行。クリスターを塗つたスキーで、針葉樹まじりの濕原を横切り、谷一つ渡つてゆるく登ります。カモシカの足跡を見、岳樺の美林から、雨で黑くなつた大岳を眺め、いかにも春スキー。駒ケ峯の西端を巻いて、宿から四時間程。頂上からの大斜面は、快適で、駒ケ峯、猿倉岳と尾根傳ひ後、林間のパラダイスに歡聲を擧げ、大滿悅。

北の赤倉岳には、一層の大雪面が、七百米もの快走をさせます。大岳を巻き井戸岳との鞍部へ登ると、宿から二時間。さんざ遊んで、又少し登ると、小岳の南側の急斜面、また一寸登ると、硫黄岳、石倉岳の東南斜面……登りが少く、降りでの實に多い、八甲田とは不思議な山、上級者にも我々にも快適、歸るを忘れました。三浦さんと酸湯の大原さんにも深謝。（網藏、古澤、沓掛、村井）



川喜田壯太郎作



圖書紹介

Hima ayan Journal
Vol. XVI 1950～1951
151 pp.

會誌の發行が戰前通りいかないのは本會ばかりではないと見え、AJも最近は年二冊二年分（即ち四冊）を一卷としているし、HJの十六卷も二年分を一卷としたものである。

卷頭には、ヒマラヤの登山史上永く記憶さるべきアンナプルナの初登頂が、隊長エルツォーグ氏によつて記されている。挿入のスケッチ・マップも親切だし、アンナプルナやダウラギリの寫眞は眞に素晴らしいものだ。

續いて一九四九年のスイス遠征隊の北東ネパール（ディテル記）、スコットランド隊のガルワール（マーレイ記）、ノールウェイ隊のティリチ・ミール（ストリーサー記）等アンナプルナと加えて都合四つの遠征が一卷に收錄されているのだが、戰前にもこんなことは餘りないと編者もかいているように、最近のヒマラヤ遠征の活況を如實に物語つている。

他にカンチェンヂャウ附近の紀行と先驅者フッカーに關するノート等があり、有益なものとしてはダーヂリンボーターの一覽表で、氏名、生年、經驗等が表示され、今後遠征を企てる場合一見の要があろうと思われるものである。

本號の編者は前卷同樣H・W・トビン氏、定價十五志、注文はMr. Geoffrey Cumberlege, Oxford University Press, Amen House, Warwick Square, London, E.C.4 で求められよう。

（T・M）

MAZAMA
Vol. XXXIII, No.13
Dec., 1951

卷頭の「西方からのマウント・マッキンレー」は一九五一年六月—七月に行われた登攀の報告で項目を分ち要約的に纏めてある點は、AJなどとは全く變つたいき方で參考とすべき點が少くない。隊員の中には、曾てミニヤ・ゴンカーへ行つたテリス・モーアや著名な米國の登山家B・ウォシュバーンの名が見える。

「マウント・ロブソンのウイシュボン山稜」はアイレス氏の筆になる一文だが、一九一三年有名なトリオと云われたB・S・ダーリング、H・L・ブルウテイ、シャウフエルベルガー（スイスの山案内）の精鋭が試みて以來未登の山稜を試みたもので、挿入の寫眞によつても極めて六つかしそうな登攀の有樣がわかる。

例によつて總アート紙九二頁、從つて寫眞はどれも綺麗だ。

（M）

A History of Mountaineering in the Alps. by Claire Eliane Engel. London: G.Allen & Unwin, 1950. pp. 296 ills 21s

文學博士クレール・エリアーヌ・アンジェル嬢の名は、近藤等編「ヒマラヤへの挑戰」でわれわれに親しい。しかし彼女の登山に關する數多くの著作は殆んど紹介されていない。

本書はフランス人の著者が、直接に英語で書いた歐洲アルプスの一登山史である。アルプスにおける初期の旅行者・科學者から黃金時代をへて、今日のスポーツ的な登攀技術に至るまでの變遷を、豐富な資料と精鮮な語彙でリズミカルに描寫している。

内容はスマイスの序文と一三章からなつている。第1章前書き、2出發點、3實驗室から山へ、4モン・ブラン（バルマーとパッカールの初登頂にからむ論爭は未刊の手記類を驅使している）5他國の山に、6親密さの芽生え、7英國山岳會、8新しい方向と意義、9服從の法則、10アルプスの最後課題、11戰時中のアルプス、12山岳と文學、13結言、山岳書目次。

スマイスもいつているように、アルプスの登山の歷史と技術を理解しやすくした最初のものであろう。アルプスの登山史は英國人がこれを開發したことは萬人の認めるところである。これを知るために大島亮吉氏がなしたような、先蹤者の業績を片ッ端から研究するのも一つの方法ではあるが、より綜合的に登山とその歷史の姿を明かにするためには、一般的な理解しやすいものが望ましい。歐洲の社會的文化的な面とのつながりなども日本にいてはわかりにくい。

本書を通讀してみて、登山の英雄は數多いが、さらに適確に同時代の人々や他の人々の業績との關連や比較ということになると、廣範な文化史的な智識と登山の文獻の飜譯と理解がなければむづかしい。アンジェル嬢はアルピニスティンであるとともに、その資格は滿足で、本書を簡潔的にまとめた文學的手腕はすばらしい。

アルプスでの登攀はいかにして育つてきたであろうか。それは一五〇年ぐらいのものであるにしても、ここでは登山が當面した色々な事柄が大きく浮び上つてくる。マロリーが「アルプスにあるよき日は一大交響樂をきく感じがする」といつた言葉が、本書の内容にもいえる氣がする。私には第六章以下は特に興味が深かつた。就中英國山岳會の役割、ウインパーの苦惱、マンメリーやマロリーの力が登山史の上で、いかに大きかつたか。またアルプスの最終課題——グラン・ジョラス、アイガーの北壁がいかに批判されているか（著者はやはりドイツ登山家をよい眼で見ていない。ウエルツェンバッハなどボロクソにいつている）また我々に全然空白だつた戰時中のアルプスの出來事（登山に經驗のない捕虜が雪のモンテ・ローザを越えてスイスへ逃亡した苦心の報告や手紙）は興味深いものである。本書がこれから起るであろう比較登山學のような、登山史に關する新しい面を示唆していることは、注目してよいであろう。寫眞は美しい。卷末の重要文獻表は便利であるが發行年などに若干の誤りが認められる。

（諏訪多榮藏）

會務報告

小集會記錄

第一四二回　二月廿日
講演　スイス・アルプスの近況
講師　會員　田口二郎氏

役員會

二月　常務理事會（十二日・二〇日）役員總會（二七日）
山岳第四六・四七年刊行の件・會費增額の件・第八回國體登山を石鎚に内定の件。
二月　常務理事會（五日・一二日）役員總會（二六日）
第七回及第八回國體登山の件・昭和廿七年度理事選任の件・昭和廿六年度決算報告・本年度會員總會の件・早大アンデス遠征後援の件・鳥海山春季講習會に講師派遣の件・立山開發鐵道會社の依頼による立山實地調査の件・高山深谷發行引受先なき旨の中間報告。
四月　常務理事會（二日・九日・十二日）臨時役員總會（一六日）
本年度役員總會附議事項決定（決算報告・豫算案・會費增額・理事改選）・京大のネパール・ヒマラヤ遠征計畫を會として繼承すること並早急にコミッテイ設置のことに決定・早大アンデス遠征は後援のことゝ決定・西堀榮三郎氏を評議員に推選決定・立山實地調査報告・山岳總索引作成報告（沼井評議員）・今年度ウェストン祭の件。

關西支部小集會

昭和廿七年二月二六日朝日新聞本社會議室で開催、藤木九三氏の「最近のヒマラヤ事情」と題する講演があつた。

圖書室基金

昭和廿七年四月廿日現在
五百圓　長尾宏也（敬稱略）
小計　五〇〇圓
前回繰越殘高　三五七四圓
殘高累計　四〇七四圓

會報編集費受贈

二千圓　霧ノ旅會

圖書室基金及會報編集費に多大の御好意を示された右各位に深謝致します。

一九五二年度
會員總會

四月廿六日（土）午後二時半
於交通博物館　出席會員一〇五
三名（内委任出席九五八名）
議長　會長　槇有恒氏

議事

一、一九五一年度事業報告　松方理事長
二、一九五一年度會計報告、一九五二年度豫算附議並會費增額の件　村山理事
役員總會で決定した議案中入會金一〇〇〇圓に對し反對あり。基本會費年額六〇〇圓、ルーム維持費年額一五〇圓（以上原案通り）入會金五〇〇圓と決定す。
尚決算報告及豫算は別掲の通りだが本年度は繰越損金を增加せしめない旨の附帶決議がなされた。
三、役員改選の件　松方理事長
役員總會推選の理事候補は原案通り可決。理事の定員以内に於て追加を必要とする場合は、その決定を役員總會に一任すること。尚役員推選の方法並現行定款に關し質問あり。理事長より本會を財團法人の改組の件は前の會員總會で決議されていながら今日迄遲延していたが今年こそは實行したい旨の發言あり。
四、支部報告
東京支部（杉本義信氏）山形支部（後藤幹次氏）の報告あり。
議事終了後左の講演及スライドの映寫があつた。
「スイス紀行」　伊藤　愿氏
スライド「スイスの山々」（伊藤氏撮影のもの及松方氏所藏のもの）尚時間の都合で「高山植物」「尾瀬」の映寫が出來なかつたのは殘念だつた。

立山の施設調査について

今回富山市に立山開發鐵道株式會社が設立された。その趣旨とする處は立山山岳地帶の綜合開發で電源及び地下資源開發の促進、觀光又はレクリエーションに彌陀ケ原の四季を開放する目的で近代的交通施設を整備するにある。この會社が設立されるに先立ち、發起人の會員中田勇吉・佐藤助九郎兩氏が槇・松方兩氏に對し個人的に屢々意見を求め指導を乞われたのだが、結局これを會で取上る事となり現地調査に應ずることゝなつた。伊藤(愿)・林・藤井・堀田の四人は四月四日夜上野を立ち、地元の諸氏と共に富山・藤橋經由ブナ小舍、天狗平小舍、追分小舍に夫々一泊し、七日に立山頂上に登り八日に下山して、直接富山市に赴いた槇・松方と一緒になり、九日の富山縣廳に於ける調査報告會に臨み、ついで富山支部の座談會にも出席した。
立山開發鐵道會社の計畫では現在の地方鐵道を藤橋迄延長し、更に美女平迄はトンネルとしてケーブルカーを通し、美女平より室堂迄自動車道路をつけて温泉・ホテ

ル等を經營する豫定らしいが、一行が示した勸告の要點は、簡素にして十分な近代的設備のホテル及山小舍を小松坂附近（追分小舍の約一キロ上方）に建て天狗平その他に理想的な山小舍を造る。自動車道路（二幅員）は前述のホテル附近に止める。そして追分より奥は一切人工的施設を增加させないことであつた。（Y・H）

本年度會費及會費納入につきお願い

去る四月廿六日開催の會員總會で本年度以降の會費は次のように改正されました。前に御送付した總會附議々案及び會報一六〇號の説明と多少相違していますが、玆に掲載したものが決定額ですから左樣御承知願います。

★基本會費　年額六〇〇圓

★ルーム維持費　年額一五〇圓

（地方會員は六〇〇圓を、東京都千葉・埼玉・神奈川居住會員は七五〇圓を御納め下さい。尙東京支部所屬會員は支部費五〇圓を加え八〇〇圓となります。）

★入會金　五〇〇圓

（尙本年度から團體登錄會費の取扱いは中止しました。但し團體代表者として入會されることは差支えありません。）

會の財政は別掲收支決算でもおわかりの通り必ずしも樂觀を許しません。支出の項目も殆ど冗費というべきものはなく、これ以下に支出を切りつめることは全く活動を中止するにも近いことです。

會は勿論今迄以上に創意工夫し支出をつめて收入を計ることは申す迄もありませんが、會員各位に於かれても年度の會費はなる可く早目に御納入下さるよう切にお願いする次第です。

★御送金の場合は振替口座東京四八二九番を御利用なさるのが便利です。

圖書室使用規定一部改正

會報一五五號掲載現行圖書室使用規定は次のように改正されました。

第七項の3、使用料に關する規定を左の通り改正する。

使用料　十人以下一回一五〇圓十人を超過するとき一人を增す毎に一五圓を加える。

尙冬季ストーヴ使用期間中は一回につき五〇圓の燃料費を納入すること。

「山岳」のバックナンバー

戰後發刊された「山岳」中左記が殘部若干あります。會員に對して割引頒布していますから未入手の方は御申込下さい。

山岳第四四年一號　一五〇圓

山岳第四四年二號　一五〇圓

（二册同時に御申込の場合は二八〇圓、送料二四圓）

尙第四三年、第四五年は共に賣切れ絶版です。

「雲取山」と「富士山」の地圖

前に國體登山用に特に作製を依頼した五萬分の一の地圖が若干殘つています。夫々一枚で雲取山も富士山も全部含まれる至極便利なものです。お知り合いの山岳團體等へも御すゝめ頂けば幸いです。

各一枚　三五圓

本年度版「山日記」

會員割引　一部二〇〇圓

（尙總皮特製本が若干あります。これは市販しませんが御希望の方には一部二五〇圓でお頒けしています。）

一九五二年度役員

會長　横　有恒

評議員　神谷恭・沼井鐵太郎・辻荘一・藤島敏男・三田幸夫・津田周二・伊藤秀五郎・今西錦司・島田巽・山崎春雄・篠田軍治・入澤文明・西堀榮三郎

支部長在職者　藤島源太郎（越後）伊藤彌十郎（福島）・大澤伊三郎（山梨）・高山忠四郎（信濃）・中田勇吉（富山）・大室貞一（靜岡）・綾田收（山陰）・池田知幸（石川）

理事長　松方　三郎

理事　伊藤愿・堀田彌一・成瀨岩雄・谷口現吉・藤井運平・望月達夫・林和夫・綾内信彦・村山雅美・千谷壯之助・村木庸益・後藤幹次・高木正孝・田口二郎・辰沼廣吉・金坂一郎・山田二郎・舟橋明賢・加藤泰安・杉本義信・沼倉寛二郎・安彦六郎・渡邊公平

（理事中堀田・谷口・成瀨・藤井・伊藤の五名は常務理事）

理事の事務分擔

總務部——谷口

總務係——望月・林

會計係——沼倉

圖書係——綾内

出版部——成瀨

山岳係——望月

山日記係——村山

會報係——渡邊

事業部——藤井

國體係——林・後藤・千谷・金坂

支部係——藤井・杉本・安彦

學生係——村木・山田・舟橋

集會係——成瀨・加藤

醫事係——辰沼

渉外部——伊藤・田口・高木

（理事長補佐——堀田）

編集後記

去年の五月に會報の編集を引受けてから滿一年、その間會報を六回出した。自分の念願したことは、日本山岳會らしい會報を出すことであつた。幸いに、毎號會員各位の熱心な御協力と、御注意とによつて、いくらかそういう目的が達せられたようである。

會報の編集は、會務のなかでももつとも繁忙な仕事であつて、私としてもこれ以上續けることが困難であり、旁々編集のやり方もやや偏りつつあることが感じられてきたので、とくに渡邊公平氏にお願いして、あとを引受けてもらうことにした。渡邊氏はこういう方面に造けいも深く、經驗も豊富で、必らず會員讀者の期待をみたしてくれるものと確信する。諸兄の御支援をお願いしておきたい。

（綾内信彦）

昭和廿七年六月十五日　發行

東京都千代田區神田駿河臺四ノ六

發行所　社團法人　日本山岳會

編集者　綾内信彦

電話　神田（自五一一一 至五一一一五）

振替口座東京四八二九番　日本體育協會

印刷所　東京都港區赤坂溜池五番地　株式會社技報堂

日本山岳會1951年度收支決算報告

1952年3月31日

收入の部

入會金	(80人分)	29.590	圓
會費	(1951年度 680人)	226.340	
〃	(1950年度 166人)	49.395	
〃	(1945年以前15人)	2.527	
廣告料收入	(山岳 45年分)	53.677	
〃	(會報分)	57.670	
山日記印税	(25年分殘)	45.000	
〃	(26年分)	36.200	
第六回國體事務費引當交付金		50.000	
會員章賣却代	(79箇)	2.680	
山岳賣却代	(19部)	3.020	
國體地圖賣却代	(36部)	870	
貸室料	(延287人)	8.940	
圖書室改造費餘剩金		8.700	
疊賣上金		3.000	
雜收入		490	
合計		578.099	

支出の部

體協關係費		23.600	圓
人件費		131.230	
事務費	(備品)	6.230	
〃	(消耗品)	17.821	
管理維持費		23.431	圓
交通費		6.322	
通信費		53.990	
公課及保險料		14.069	
事業費	(小集會及ウエストン祭)	9.365	
〃	(第六回國體現地費)	8.600	
〃	(印刷費)	2.550	
〃	(會議費)	6.412	
〃	(交際費)	4.250	
出版費	(會報)	124.927	
〃	(山岳 45年一部)	143.870	
委託山日記代金	(前年度分)	56.870	
會員章製作費		2.000	
臨時費	(借入金返濟)	13.000	
〃	(前會長記念品)	5.000	
〃	(圖書室改造費)	7.626	
〃	(前年度繰越支出)	62.423	
雜支出		1.440	
合計		725.026	
差引繰越支出		146.927	

日本山岳會1952年度收支豫算

1952年4月26日

收入の部

入會金	(@500×60人)	30.000	圓
會費	(1952年度)	360.000	
〃	(1951年度)	40.000	
〃	(1950年度以前)	4.000	
廣告料收入	(山岳)	100.000	
〃	(會報)	60.000	
山日記印税	(27年分)	57.000	
第七回國體交付金		50.000	
會員章賣却代		3.000	
既刊山岳賣却代		3.000	
國體地圖賣却代		3.000	
貸室料		10.000	
合計		720.000	

支出の部

體協關係費		33.000	圓
人件費		140.000	
事務費		30.000	
管理維持費		40.000	
交通費		10.000	圓
通信費		20.000	
公課及保險料		20.000	
事業費		35.000	
出版費	(山岳及送料)	146.800	
〃	(會報及送料)	151.000	
〃	(編集雜費)	2.000	
會員章製作費		2.000	
圖書購入費		10.000	
豫備費		10.000	
前年度繰越損金一部引當		70.000	
合計		720.000	

附帶決議

1. 前年度繰越損金中本年度返濟分の實行を嚴守すること.

2. 次年度へ新たな損金の繰越を防止すること.

東京信託銀行は
おなじみの三井に戻りました
三井信託銀行
本店 東京・日本橋室町
支店 人形町・蔵前・新橋・横浜・金沢
名古屋・京都・大阪・神戸・福岡